

小田原史談

第99号

発行所 小田原史談会
小田原市南町2-3-21

広沢伊助さんを思う

相沢栄一

私が中学一年生の頃、大正十年前後の小田原には、国道ぞいの町並にも、まだ旧東海道らしい面影が残っていた。その頃、今の宮の前の本町四角から新道の入口迄の間に、高い黒板塀に囲まれた、入母屋造り総二階の老舗らしい店舗の建物があった。小田原屈指の料理店として当時栄へていた天利、其処が広沢伊助さんの生家でした。その頃は長兄と共に家業に勤んで居られた。尚商柄、当時隆盛を極めていた、小田原の花柳界、その名花達の出入も多かったので、広沢さんは当時から清元や長唄、小唄等も嗜んでいた。歌舞伎や新派の芝居に親まれたのも其頃からだったでしょう。大震災で家が全焼されたのを契機として、長兄は明治の

中期頃から長く続いた老舗天利の店を閉じられた。広沢さんはその角地を継承され、二階建の家を建てられ、後に其処で十五夜と言う家号の、当時の小田原として風格のあった、喫茶店を初められたのでした。町に純喫茶の店もあまりなかった、時代でしたので、御店も結構繁盛されたようだった。十五夜は当時土地の映画や文学を語る若い人達の集いの場ともなっていた。私と広沢さんの出合も、此頃で多分昭和十年頃だったと思います。仲間を集めて優秀な映画を見るために私共若い者が広沢さんを中心に小田原映画鑑賞同好会を私達は、デ・ビュエの商船テナンターや望郷、ジャク・フェイのミモザ館

や外人部隊等々の人間の真実を描いた、フランス映画を鑑賞して感動を致したものでした。会の事務所が十五夜さんの御宅にあったもので、私達は御宅の二階に御邪魔しては、好人物の広沢さんや明朗な奥さんに随分御厄介になったものでした。其頃広沢さんは芝居を見に行く仲間達と台本の朗読会もやって居った。私も宴席で幾度か広沢さんから歌舞伎役者の名科白の口演を聞かされた事もありました。長らくやられた喫茶店を止め、御店を寿司店に模様変えられたようでしたが、あの場所の立地条件が変化して来た故か、寿司店も二、三年で止められ、以後商売とは離れられた。

和歌の仲間にも入りよく作つたし、俳句もやつた。晩年には川柳もやられ地方の同人誌に投稿されたらしい。旅も好きで新聞社にも参加された。多趣多芸の人

だった。史談会も恐らく結成当初からの役員だったと思う。持前の熱心さと、顔の広さで会員増強のために随分御尽力を取つたようでした。ペンを取つて居る私の腹に、様々な時代の大様に好人物な広沢さんの面影が浮んで消へて行く。

初夏の暑い日、中野会長と香川、杉崎、鈴木の諸氏と共に私も病める広沢さんをお大儀の湘南平下の小高い岡にある老人ホームに御見舞に訪れたのでした。それが御会いた最後でした。それが遺族の方には、一生を我儘で通したと言う。

だが而し、広沢さんの我儘も、又あの人の好い大様さも、青少年期を小田原一の料理店、天利の次男坊として、甘の構造の下で育まれたためではなからうか。れっきとした御長男夫婦が居りながら、湘南平の北麓の老人ホームのベッドで晩秋の夜風に落ちる枯葉のように淋しく旅立たれた、広沢さんの事を思うと言いたい。この事を話すと、会長は私よりもっと、公憤して居るので、是れは只では済まない。必ず抗議を申し込むと、えらい公憤振りであった。それから半月程たって又訪問すると、鎌倉の作者の宅に行き抗議を申込むと、驚いたことに、曾我の者達より伝説から歴史迄も、研究し

草もえるについて一言

神保西造

前号に千代の富田千春さんと、田島の杉崎正吾さんが、草もえるに付いて、貴重な歴史をお書きなされ拝読して嬉びました。ところが、私は草もえるを見て、憤慨せざるを得なかった。それと云うのは曾我五郎が頼朝の尋問を受けて無返だ／＼と、叫びながら刑場に引かれて、首を切られた。あの様なことを五郎に云わせた、作者の気持が癪にさわった。からである、早速兄弟保存会長の宅に行き、此の事を話すと、会長は私よりもっと、公憤して居るので、是れは只では済まない。必ず抗議を申し込むと、えらい公憤振りであった。それから半月程たって又訪問すると、鎌倉の作者の宅に行き抗議を申込むと、驚いたことに、曾我の者達より伝説から歴史迄も、研究し

次男の明さんが勤の身の多忙の中を嫁がれた御姉さんに支援されながら、最後まで広沢さんに尽された。あの美しい心情を讀み、広沢さんの御冥福を御祈り致します。

は二月号の月報に次の様な文を書かれた、NHKの連続ドラマ「草燃ゆるは初め興味を以て毎回見るようにしていたが、途中からはあまり陰惨なので興味がなくなり、時々しか見なかった。想うに源頼朝という人は生れながらにして武家の棟梁たる風格器量を備えていた人であろう。石橋山の朽木にかくれていた頼朝を一目見て梶原景時助けておけば、他日必ず大物になる」と、思わしめたであろうことが想像される、木曾義仲や平家討伐の功の多くは義経や範頼に帰すべきであつても、それは頼朝という大きな背景があつてのことである。ところが陰惨な性格は、木曾義仲が亡んだ頃から現われ始めた。義仲からの人質として預つていた息子を木曾に帰すと言つて喜ばせ、出立させておきながら、実はかたて計画に従つて途中でその子を殺させた。義経の子と恋仲であつた頼朝の長女の大姫は、その卑劣な遣り方に痛憤し痛嘆して、父を信じなくなつた。義経を追つた後、その愛妾静の生んだ子も男の子であつたから殺させた。その以前に大姫は「この鎌倉という所は邪魔者は皆殺せ」という恐ろしい所である

と。静に対して言っている頼朝の最も腹黒い性格は、平頼盛に対する遣り方に現われている。頼朝がその十三才の時平治乱に破れ平家に捕えられたところを助かつたのは清盛の継母池の禪尼の懸命な命乞いによる、池の禪尼の子の頼盛が、源平両家の和議に頼朝を訪ねた時これを待遇するに感戴し重を極め源平両家の和議についても頼盛の意見を大いに取入れ頼盛を出立せしめていた。しかしそうしておいて頼朝はあとから、人をやつて頼盛の帰国を遅らせ、其間に義経等をして平家を亡びしにくさした。流石の政子もあきれて「あなたは恐ろしい人」と言っている。頼朝には腹黒い貴方が数知れずあるが、それは一体頼朝等源氏に何がプラスになつたかという何にもならず、その身も落馬がもとで怪死してからは、頼家、実朝の二代は名ばかりの將軍で、しかも二人とも殺されている。以上は約八百年の昔の話であるが、この頃の邪魔者殺しは主として我が胎児の中絶に現われしき知ぬとしてその結果恐ろしさ知らぬ点においても八百年の前の頼朝とあまり違わぬのである。その徳禽獸に及ぶ者は聖者といわれているがその徳胎児に及ぶぬ者は何であらうか。

話の前に戻るが兄弟保存会長は、此の大名譽は必ず取返さねばならない、そのれには此の曾我の梅を、村

「後北条氏秘話」を

会報掲載するに当り

香川 政 治

(中野敬次郎氏執筆)

まえがき

月刊雑誌「かな川風土記」に連載中の「後北条氏秘話」を一読是非共会員の皆さんにも読んで戴きたいと中野先生の承認を得て「かな川風土記」掲載のものをそのまま丸写し貴重な会報の紙面の一部割愛し会報に載せました。皆さんの参考共なれば幸と存じます。

後北条氏の秘話(1)

小田原城落城後の北条一族の行方

(一) 悲壮な氏政、氏照の最後

天正十八年(一五九〇)小田原城が豊臣秀吉の攻略を受けて落城した時、小田原北条氏の当主は五代氏直で年二十九歳であつた。父の

民の協力を得て、何倍もの梅林を造り、名実共に日本一の名所とせねばならない。そして季節には何百万人と云う人の来る様にする。ことだ、と云つていたが、私は早年齢八十三才それを見る事が出来るか。何うか？

四代氏政が五十三歳で隠居していたがなお健在で、氏政の弟氏照五十一歳(四十九歳ともいふ)と共に後見役をつとめて実権をふるつていた、それに当主氏直の夫人督姫が徳川家康の娘であつた関係もあつて、氏直は死一等を減ぜられて剃髪し高野山に追放されることになり、戦争の責任は氏政と氏照二人がとることになつて、切腹を命ぜられたのである。七月五日、氏直降服して落城となり、翌六日に小田原城引渡りとなつて、直ちに城中の北条方將士を小田原城から退散させ九日になつて氏政、氏照を城下の町の特医田村安栖(安齋軒)の邸宅に移し、十一日に二人に割腹を命じたのである

安栖邸へは、秀吉から石川貞清、蒔田正時、佐々行成、堀田若狭守、家康からは榊原康政、井伊直政などが検使として遣われ極めが嚴重な監視のもとでの最後であつた。当時兩人切腹の場に居合わせた氏政の御伽衆土屋検校の語るところによると、(土屋検校語草)その最後はまことに立派なものであつたが、切腹の時刻が近づいたとき、盲目の土屋検校が氏政のそば近くにじり寄つて「私事、盲者の者でありながら、久しくお側でご愛顧を受けたものでありますから、せめて死出の道つれにお供いたしましよ」と泣きながら申し上げると、氏政は毅然として聞き入れず、「何を申すか。苟も十万の軍の大將であつた者が、盲目一人を附添いにして死んだと言われるのは本意でない。どうか離れよ」と云つたのでやむなく側を離れたが、その時氏政が「死に臨んで一句もないのは恥かしいからこれをよろしく人々に伝えてくれ」といって

今把吹毛剣、破破乾坤帰那因。

と言つて、三度口うつしに検校に伝え唱じた。そして弟氏照の方に向つて、互に目と目を見合させた後に「いざお供申さん」と言い

兄弟相次いで割腹したというのである。この時、介錯に當つたのは、兩人の弟で、伊豆菫山城主であつた北条氏規で、兄達の首を人手にかけるのは残念だといつて、自らすすんで介錯に立つたのであるが、兄弟の首を打ち落した後に、感極まつて慟哭しその刀をとり直し、押肌抜いて後を追おうとしたが、井伊直政のために抱きとめられて果たさなかつたのである。

多すぎる氏政の辞世に疑問の他に和歌が数首伝はつていて、「小田原記」に

秋あらばこそ
紅葉の残る
恨みそ花の春
吹くと吹く風な

月も胸の霧も
はらいにけりな
秋の夕風
我身いま消ゆとや
いかに思ふべき
空より来り
空に帰れば
北条左京大夫氏政
天地の清き
中より生れ来て
ものすみやかに
帰るべらなり
舎弟陸奥守氏照

兄弟相次いで割腹したというのである。この時、介錯に當つたのは、兩人の弟で、伊豆菫山城主であつた北条氏規で、兄達の首を人手にかけるのは残念だといつて、自らすすんで介錯に立つたのであるが、兄弟の首を打ち落した後に、感極まつて慟哭しその刀をとり直し、押肌抜いて後を追おうとしたが、井伊直政のために抱きとめられて果たさなかつたのである。

と記してある。

こうすると氏政の辞世は遺傳一句と和歌三首とあるわけであるが、これはいかにも多過ぎる。氏政は禪修業の深かった人であるから遺傳はさすがに彼の素養をうかがえるものと思われ

が、問題は和歌で、辞世の和歌を幾首も作るというのもおかしいし「小田原記」の方の歌は氏政の歌としても一応承服ができるが、「太閤記」の二首はいかにも風格がなく、この場合に合わせるように詠んだらしいところが見えて、和歌については一達人である氏政のものとは思われない、恐らく、この場面に仮託して「太閤記」の作者が誰かが作ったものであろう

判らぬ首級の行方 さて氏政、氏照の最後はさすがに関八州の太守とその弟と云うにふさわしい立派なものであったが、首級は直ちに石垣山一夜城の秀吉の本營に届けられて実検に供せられた。秀吉が、天命を恐れざる者ゆえ、天下の見せしめに梟すべしと言うので京都に送られた。首級が京都に着いたのは七月十六日で、即日一条戻橋に梟首となった。当時の公卿の勅修寺晴豊の書いた有名な「晴豊公記」の七月十六日の条に、「北条首、おとと

むつのかみ首のぼ申候。関白より書状、菊亭、余、中山三人あて所披露申候。則返

酒へりとあつて、晴豊が友人と一条戻橋まで梟首の見物にでかけていることが知られ、併せて、帰路にどこかの料亭で大酒しているが恐らく人生の無常を感じたことであろう。

さて氏政、氏照兄弟の首級のことであるが、両人切腹のとき介錯に立った弟の氏規が、兄達の介錯をしたあと自害をしようとしたので、その場の検死役であった井伊直政が走り寄って抱き止めたことは前記の通りであるが、この時氏規が自害を哀願して止まないのを井伊直政検死役が、いろいろなぐさめたり教訓したりして、やっと命をとり止めたが、この騒ぎのとき、山角牛太郎という氏照に愛せられた小姓が氏照の側においてこの騒ぎのすきに自害した氏照の首を奪って逃げたという事件がおき、やっと牛太郎を説諭して首をとりかえたのであった。

それ故、京都一条戻橋に梟首された首級は、まぎれもない両人の実物であるが、梟首後どう処置をされたものか、一切資料がなくて不明である。京都のどこかに

埋葬地がないか、北条氏関係の寺院を訪ねたがどこにもない。富士市に伝わる「氏政の首塚」

ところが最近になって、妙なところから北条氏政の首塚というのが現れてきた場所は静岡県富士市蓼原(たではら)一五番地の源立寺という寺院で、寺の境内に高さ一メートル程の古い五輪塔があつて、刻字はないが、これが氏政の首塚であると言ひ、寺仏によ

ると、北条氏政が梟首されたとき、氏政の弟佐野新左衛門尉という人が京都から持ち来たり、こゝの大きなまぎの木の下に埋葬したと伝えるので、数年前にそのまぎの木が枯れたとき、その附近を発掘したが、何も見つからなかったという。この地方は佐野という姓の家が多いが、天正十八年の小田原戦役のとき、下野佐野城主佐野修理亮宗綱の養子となつて佐野家を嗣いだ氏政の弟氏忠が、この戦に多数の佐野一族、家の子弟を引具して小田原城に入つて豊臣方と戦つたが、小田原城の落城したとき、佐野城は秀吉側の手に落ち

た現存の東海道線小田原駅前にある。これは北条時代、土着としたので、その時、氏政の首級も京都から早雲寺木」と云う北条氏の

持ち来つて土着の地に埋葬したものであるという。寺は小田原北条家の三ツ鱗紋を用いており、小田原北条家に伝わつた護持念仏といふものがあつて、高さ一尺三寸の正観世音菩薩の木立像を納めた厨子があつて、厨子にも三ツ鱗紋がついて

いる。厨子も立派であるが観音像は鎌倉期のもので思われ優作である。北条氏直の持念仏であつたと言われ。寺内に佐野氏忠の位牌がある。

(表) 当寺本尊者北条氏直守本尊也、領主相州小津城主佐野新左衛門尉 天正年中納之(小津城は小机城の誤りか) (裏) 用勝院尉宗讀日妙 神儀とあつて、いろいろの点から、小田原北条氏と縁故の深い寺院で、首塚も相

当のより所もあるようだが確証は得られない。ところが氏政も氏照も胴体の埋葬されたところは明確である。 兩人自害の地は侍医、田村安福邸で、小田原城下町の箱根口に近いところであるが、実際の墓は相当離れた現在の東海道線小田原駅前にある。これは北条時代に、伝心庵(臨濟宗、湯本に、伝心庵)と云う北条氏の

氏寺があつたので、遺体をここに葬つたのである。伝心庵は北条氏の頃は寺域三千坪を有して一門の人々も

多く埋葬された所である。北条家代々の当主と夫人は氏寺第一格の湯本早雲寺に葬つたが、氏政を早雲寺に葬らなかつたのは、彼が敗亡者であつたことと、もう一つこの当時、早雲寺が秀吉の兵火に焼けて荒廃して

いたためであらうと思うが伝心庵の方も北条氏滅亡のため荒廃放置されていたのを、七十四年後に、稲葉氏が小田原在城のとき、追福のために墓所を築いたのが現存するのである。その墓碑文は、 (表) 慈雲院殿勝岩傑公大居士 青雲院殿透岳関公大居士 (右) 天正十八庚寅年七月十一日 (左) 天正十八庚寅年七月十一日

北条氏政公 御生害之場所 北条氏照公 御生害之場所とある。 伝心庵は北条氏滅亡後、大久保家の時代になつて城下町の外の寺町に移されてその跡に大久保家の六内庵とされ、自然墓地も永久寺となつたので、粗略に扱われ

たから人びとに忘れられ、氏政の墓と言へば、早雲寺の北条五代墓の一つが知ら

れているが、これは寛文十二年に北条氏の末裔の、河内狭山藩主北条氏治の建立したもので、ここには遺骸は埋葬されておらぬ。氏照にしても八王子市の八王子城麓の宗関寺に立派な宝篋印塔の墓があるが、これは元禄二年遭厄鉄山無心の建立したもので、これも遺体を葬つた所ではない。

(二)北条氏直の悲劇の経路 天正十八年小田原落城のとき当主北条氏直は二十九才であつた。父氏政と叔父氏照とが責を負うて割腹したので、氏直の方は一命を助けられて高野山に配流されることになつたが、六月二十二日母(継母)は小田原籠城のさなかに城中で急死し、やがて七月五日には降服して落城、七月九日父と叔父とは城外田村安福邸に移され、十一日兩人割腹、十二日氏直へは秀吉から高野山追放の命が下り、七月二十一日には氏直はすでに隨従の三百人の旧家臣をつれて、高野山に向けて小田原を出発していった。氏直には心身動願の一ヶ月であつた。

当時石垣山一夜城の本營にいた秀吉は、月俸五百石を扶助して一行の途中の旅

宿の費に充てしめられたが、さすがに徳川家康の方は氏直夫人の父であったから、この日、今井の陣屋から出て芦子川の惣門の辺から氏直一行の落ち行く姿を見送った。そして家臣松平家忠に命じて駄馬を出して荷物の運送を助けさせている。

氏直夫人督姫は、降服に先立って五月三日に城を出て降服の誓約の人質として父家康のもとに送られていたのであるから、恐らく今井の父の陣屋にあったが、この日は父とともに芦子川の惣門辺で、ひそかに別れた夫君の落ち行く姿を、涙ながらに見送っていたものと想像される。まことにあわただしくも悲しい小田原陥落の次第であった。

何しろ追放者、没落者という身分で三百余人の従臣をつれての旅であるから、途中いろいろ困難、苦勞があったらしく、八月十日に奈良に入ってから花蔵院に宿泊した前後の有様を記した「多聞院日記」の筆者は、最後に

「哀れ成る有様ナリ、搜テモ命ハ捨テ得ザルモノナリ浅猿々々」と記している。そして八月十二日に高野山に到着して高室院に入ってから閉居して秀吉の後命を待つ身となったのである。一体、氏直は秀吉の小田

原攻めの際の、北条家五代の当主であったのに、隠居の父と叔父が責を負うて割腹させられ、氏直が一命を助けられたのは、彼が徳川家康の女婿であったこと、また籠城のとき強硬な父氏政の命をきかず、秀吉への降服を踏み切ったことと、それに家康の秀吉への助命の懇請にもよるものであった。

さて氏直の高野山での宿舎となった高室院というのは、高野山での修験道の本拠で、特に相模国に關係が深く、相州徒の寺は約三十カ寺に及んでいる程で、小田原北条氏との關係は密接で、相模一門の權柄について、「永正年中、小田原之城主長氏（早雲のこと）より、相州一門大小人残らず高室院旦那たるの条御墨印を被成下候より、相州在々、悉く当院の旦那たる旨他の妨げ御座無く候ひき」（慶安二年十二月高室院文書）

と申しており、氏直小田原城主当時にも高室院宛の朱印状を与えているほどであるので、氏直の高野山入りには、この事情をくんで秀吉の温情で高室院が選ばれたものであろう。何しろ氏直は三百余人の旧家臣を引具しているのだから、受け入れの高室院側

も大変だったようで、それらの従者は宿坊に分宿させたが、氏直も初め宿坊に居たのを、それでは気の毒だというので、高室院上人の私宅に招き入れたのである。昨日まで関八州の太守であった身が、今日忽ちにしてその祖先伝来の国土を失い、母は自害し、父は処刑され、妻とは別離し、悄然たる孤影を雲霧深き高野山の一角にさらしている氏直には、長らう命も味気なきものであつたらう。その上冬も来たって高野の山の寒気は甚しかった。

秀吉は氏直とその一族郎党が深山の寒気と食糧の不届に苦しみつゝあることを聞いて、これを憐んで早速に十一月十日に氏直一党を下山させ、河内国天野村に移したのである。天野村の所がその住居であった（大阪府長野町）

大名に列し夫人と再会、そして急死年を越えて天正十九年（一六九一）となった。この年の正月、徳川家康が関東から京都へ上洛して来たので、この折をとらえて家康に秀吉への取りなしをしてくれるよう依頼したので、家康がこれを実行してくれたのであろう。秀吉は氏直の罪を赦し、その上、知行

として関東内で九千石、近江で千石、都合一万石を与えることを約して家康宛に次のような朱印状を出している。

「北条氏直事、其方御理被申候附而、國を広被成赦免之条、被得其意、知行於關東九千石、近江千石、都合老万石、為合力、被遺之可然と存候。 天正十九年 二月七日（天正十九年） 秀吉朱印 武蔵大納言殿」

とある。ここにおいて、とまかくにも氏直は罪を赦されたので、一万石の大名となったので 三月大阪に至って秀吉に謁見し、五月上旬には天野を引き払って大阪に移ることを許され、ひとまず内府屋形（家康屋敷）に入り、後に織田常真の旧宅を与えられて住んだのである。家臣の松田哲斎直憲が高室院に宛てた五月十一日の書状（高室院文書）に「大慶の事に候」と感激しているのは、北条家主従一類の氣持であったに違いない。

「相州文書」（内閣文庫所蔵品）の中に、この年八月二十五日付で氏直が家臣山上強右衛門に対して走り廻りの恩賞として関東の内二百五十石、河内の内で百石、合計三百五十石の地を与えている文書があるから氏直が関東、河内合わせて一万石の采地を秀吉から賜っているのは事実である。

そこへまた、氏直には大きな喜びがもう一つやって来た。それは落城の騒ぎの中にわりなく中を引き裂かれていた夫人督姫との一年余振りの再会が出来たことであつた。

氏直と夫人督子姫との仲は天正十八年七月以来永久に離別になつてしまつたものと、普通には思われているが、事實はこのときは離婚ではなく、一時の別居であつたのは、これを示す文書を見るに及んで驚いたのである。 二人の仲を離婚とせず一時の別居に止めたのは、恐らく夫人の父徳川家康の思慮深い配慮であつて、女婿氏直が罪が赦されて大名に復帰する日の必ずあること自信がそれを表現して見せたのであろうと思う。

ところで、今回の氏直と督姫の再会は、家康の意を含んだ氏直旧臣板部岡江雪や施薬院全宗、高室院上人などの力を合わせた計画と奔走によるものであるらしい。板部岡江雪齊祐成は北条家の栄えていた頃から重臣で、才学がすぐれていて有名な人物であつたが

小田原落城後家康の命をうけて氏直夫人を預かりその守護に任じていたのであるが、秀吉の所望によつてその御伽衆に加わり、名を岡部江雪と改められた。また全宗は比叡山の僧であるが施薬院使に補せられて秀吉に近接していたので、これらの氏直親懇の人々が、氏直の大名復帰を機会に夫婦の再会の肝煎りをしたものであるに違いない。

このことは氏直の喜びは言うまでもないことで、彼は再会の二十七日の翌日「就中、女房衆昨日罷着し候、是又御肝煎故、旁参洛之上、会面を以て可申宜候」（前田家文書）と言っている。氏直の家来衆の喜びも一方でなく、近侍世話役の山角直繁のこの頃の書状（高室院文書）には「未だ女房衆も不被參候定めて一兩日中に可有之候」とか 「近日從小田原御女房衆被參候。依之、取籠申候」

とか述べて忙殺されている様子である。

氏直は八月十九日に秀吉に召されて種々懇意をうけた後、来春には唐に出動(朝鮮征伐)するから、それに秀吉と一緒に供するよう仰せつかっているのである。氏直に再び花開く幸運の日が来るかに見えた。しかし何故か天はこの若き国主に永い生命は与えてくれなかったのである。晴天の霹靂、氏直は急死したのである。

謎に包まれた氏直の急死

北条氏直の死については死亡の年月、死亡の原因、死亡の場所などに種々の説がある。

「寛永譜」(寛政重修諸家譜も同様)系統の記録には、天正十九年十一月十一日、三十歳で河内の天野で歿したということになっており「小田原記」系統の記録では、秀吉に大阪を召されて、伯耆園一カ園を与えられることになっていたが文禄元年(一五九二)十一月四日に三十一歳で歿したとある。また「武徳大成記」などの徳川家系の記録には、天正十九年三月に天野より泉州堺の興成寺に移り半年の後に大阪に呼ばれ織田常真の旧宅を与えられて住んだが、この年痘瘡を患

って病死したとあるし、また大関記には、天正十八年五月大阪に召し出され、来春西国の一ヶ園を与えられた恩命をうけたが、少し後になって痘瘡を病んで三十三歳で歿したと述べている諸説のうちどれが正しいかと言えば天正十九年十一月四日三十歳とするのが正しいと思う。「多聞院日記」の天正十九年十月二十九日の条に

「相州保(北の誤り)条氏直大阪ニ在リ。近日痘瘡ヲ煩フ祈禱也ト云々、遂ニ死去云々」とあるから、氏直が痘瘡を患ったことは事実で、この記事の天正十九年十月二十九日以後の数日に死亡したことが、この記事で察せられる。

また一方、こゝに氏直の臣山角治部大輔直繁が天正十八年十一月十四日に高室院に宛てた書状があるが(高室院文書、山角直繁書状)の中に

「仍氏直存生之刻借用被申候黄金、木利合參拾参兩相調、高福院、唯仙御向所へ相渡申候」というのがあるが、これは氏直が在世中に高室院から借用した黄金元利合計三十三兩を、相ととのえて高福院と唯仙の御向所へ御渡し申し上げたので御受け取り下さいという意味で、ついでながら言

うと、氏直は天野、大阪時代の僅か一年余の間に高室院を初め諸所に借金を申し入れている文書を数点残しているが、三百人からの郎党をかかえて浪人生活はよほど苦しかったようである。とにかくこの山角直繁が出している天正十八年十一月十四日の文書の文面を見ると、氏直がすでに死亡していることが解るのである。そうすると「多聞院日記」の十月二十八日以後、「山角直繁書状」の十一月十四日以前の死亡ということになるので、前記諸説の中の天正十九年十一月十一日が正しいか、十一月四日が正しいかという点、高野山高室院所蔵の「北条氏過去帳」にある十一月四日を正し

いとすべきであろう。その「北条氏過去帳」には次のように記されている。

「日牌 相州小田原北条氏直 松巖院殿大円宗 徹大居士 神樂印塔 天正十九年十一月四日 大導師孫九郎奉之」とある。箱根湯本の北条五代墓石にもこの天正十九年十一月四日をとっている。氏直が三十歳という若さで、このよう急死をうけたことから、その死についてはいろいろな説が生れた

のであろう。死亡地も大阪に違いないと思うが、前記のように天野説などもあつて、大阪府「狭山町史」などには何のこだわりもなく「氏直は十一月四日天野に卒した」と書いている。氏直死してその遺骸がどこに埋葬されたのであるか本当のことは、これも解らぬのである。箱根湯本早雲寺の北条五代の墓は有名であるが、この五代墓石は、北条氏一族で河内狭山藩主になったいわゆる狭山北条家の藩主北条氏治が寛文十二年八月十五日に再建したもので、本来のものではない。それ故「新編相模風土記」にも早雲、氏綱以外の氏直については、「其余ハ寒ノ墓地ナルヤ否カ、タシカナル所見ナシ」と言っており、氏直が大阪に卒したものを遠く小田原まで運んだ証左もないので、五代墓の中の氏直墓石はやはり寛文十二年再建事業のときの新設であろう。天野にも墓はない。大阪のどこにもない。氏直の遺跡を継ぐ人と定められた北条助五郎氏盛の墓が、大阪市南区上本町の専念寺にあるので、氏直のもそこにあるかと訪ねて見たら無かった。ならば高室院蔵の「北条過去帳」に見え大導師孫九郎奉納の印塔というものが氏直の本墓な

のであろうか。しかし今はこれも見当たらない。北条氏直の死については、いろいろの問題があつて、実の如謎に包まれた状態である

百六十年を迎えた吾が国鉄と 外国鉄道の四方山噺

額田 喜代春

で、日本の新幹線を真似て実用化を急いでいるようですね! (イ) ロンドン郊外の通勤形の国電は日本の地下鉄のように、第三軌条から電気をとり入れています。(ロ) スイスはアルプス山地にある国だけに、主な都市を結ぶには急勾配でトンネルの多い区間を越えて鉄道をつくらねばなりません。そこで、豊富な水力電気を動力源として、早くから電化がすすめられ、登りに強い、機関車や電車が進められました。また、登山鉄道も発達して、機関車の歯車とレールの歯形をかみあわせて登る登山電車が沢山あつて観光客を運んでおります。(ハ) イギリスは世界で最初に鉄道を開いた国だけに、百五十三年前の一八二五年には歴史的な鉄道車両や、

施設を大切に保存している
 そうです。しかし、一方では、蒸気機関車を無くして
 ディーゼル化や電化を積極
 的に進め、大都市間には、
 「インター・シティ」とよ
 ばれる高速列車を走らせて
 います。そして、イギリス
 の国鉄車両は、正面が黄色
 く塗られているのが特徴で
 す。

(二) ソビエトのモスクワの
 地下鉄は発達していて、駅
 も宮殿のように立派なよう
 です。それから、最もソビ
 エトらしい鉄道は、なんと
 いったもシベリア大陸を横
 断する貨物列車で、石炭や
 鉄鉱石が数千キロも離れた
 工業地域に運ばれています
 。

そして、大都市どうしを
 つなぐ高速列車や、大都市
 の地下鉄建設にも力が入れ
 られており、モスクワ地下
 鉄の駅の施設は、芸術的な
 デザインで有名です。

(三) アメリカ合衆国は鉄道
 と共に発達してきた国でし
 た。しかし、二十世紀に入
 ると自動車との競争がはげ
 しくなり、その後更に民間
 航空の発達で、一層おとろ
 えをみせてきました。

現在のアメリカの鉄道を
 代表するものは、広い大陸
 を時速百キロの快速で横断
 する長い貨物列車であり、
 ニューヨークからワシント
 ンの間を結ぶ、メトロライ

ナーのような高速旅客列車
 です。また郊外通勤鉄道も
 増えております。

メトロライナーという電
 車は、日本の新幹線に刺戟
 されて、大都市間の超高速
 輸送用につくられた電車だ
 そうです。

(四) 西ドイツの鉄道は、一
 九六〇年代まで、すぐれた沢
 山の蒸気機関車を運転して
 いることで有名でした。

しかし、現在では幹線鉄
 道の大部分を電化して、時
 速二百キロを出せる強力な
 電気機関車の引く列車が主
 力として活躍しています。
 また、大都市どうしを止ら
 ないで結ぶ、インターシテ
 イ列車や、市内交通機関と
 して市街電車の活躍が目だ
 つています。

(五) イタリアの鉄道
 イタリアは、ヨーロッパ
 でも早くから電化をすすめ
 て、北部の工業地帯と首都
 ローマを結ぶ幹線には、高
 速の電気機関車の引く列車
 や、電車列車が活躍してい
 て、最近では、日本の新幹
 線にみの時速二百キロの高
 速鉄道が建設されておしま
 います。

また、イタリアの振り電
 車というのには、最高速度二
 百五十キロを出せるイタリ
 アの新幹線として活躍が期
 待されているそうです。

(六) オーストリアの鉄道
 オーストリアで最も重要
 な鉄道は、大陸内部の鉱山
 や、農場、牧場から鉱石や
 農畜産物を海岸の都市へ運
 ぶ鉄道です。そして、長距
 離の旅客列車は、民間航空
 におされて運転回数も少な
 いのですが、豪華な設備の
 列車が各州の首都どうしを
 結んで走っております。

そして各州毎に線路の幅
 (ゲージ) が違っていたた
 め、直通運転が出来なかつ
 たのですが、現在では、改
 良されつつあるそうです。

(七) インドの鉄道
 インドはアジアの中では
 鉄道がよく発達している国
 ですが、地域によって線路
 の幅(ゲージ) が違うので
 あまり統一の取れた鉄道と
 は言えません。

それがため、大型の蒸気
 機関車が、現在も幹線で活
 躍する一方、輸入した電気
 機関車も走らせています。

(八) フランスの鉄道
 鉄道によってヨーロッパ
 の大都市を結ぶ目的で、T
 E Eとよばれる国際特急列
 車が、フランスをはじめ、
 スイス、イタリア、オラン
 ダ等八ヶ国が参加して運転
 されています。

フランスでは、ヨーロッ
 パで最高速の列車「アキテ
 リス」や豪華なサロンのよ
 うな設備をもった「ストラ

ル」などが、T E Eとして
 活躍しています。

フランスの鉄道は新しい
 技術を大胆に取り入れ実用
 化していくことで有名です
 。

また、他国にさきがけて
 ガスタービン車を実用化し
 たり、音の静かなゴム空気
 タイヤの地下鉄をパリに走
 らせたりしております。

(九) オランダの鉄道
 オランダの鉄道は比較的
 早くから電化され流線形の
 電車が主な都市を結んで、
 数多く運転されています。
 土地が低く水路の多い国
 土であるだけに、長い鉄橋
 や、可動橋も多く見られ、
 オランダらしい風景の中を
 走っております。

(十) ベルギーの鉄道
 ベルギーでは、幹線は電
 化されていますが、ローカ
 ル線では、ディーゼル機関
 車の引く列車が活躍してい
 ます。

フランスやオランダ、西
 ドイツの間、多数の国際
 列車が通じていて、特にT
 E Eの多くはベルギーを通
 っています。

(十一) スペインの鉄道
 スペインは隣りのポルト
 ガルと並んで、鉄道の電化
 が比較的遅れています。国
 内は山地で急勾配や急カー
 ブの線路が多く、タルゴの
 ような急カーブに適した列
 車が開発されています。

それから線路はヨーロッ
 パの標準より広くなってい
 ます。

(十二) オーストリアの鉄道
 オーストリアもアルプス
 山地の中にあつて、早か
 ら幹線の電化が進められま
 したが、一方では、ラック
 レールを使う登山鉄道や、
 ローカル線では蒸気機関車
 が残こされていて、観光客
 の輸送に活躍しています。

(十三) 暮しと鉄道
 私達の日常生活は、交通
 機関なしでは一日たりとも
 過すことが出来ません。そ
 の中でも鉄道は最も身近な
 交通機関の一つといえまし
 ょう。

例えば、通勤、通学、買
 物、旅行のような人の動き
 だけでなく、私達が毎日必
 要としている食糧や、品物
 の多くが、鉄道によって運
 ばれているのです。

そこで、朝夕のラッシュ
 アワーに、出来るだけ多く
 の乗客を、できるだけ速く
 運ぶために、大都市の電
 車は独特な形をしています
 。

例えば、扉の数をふやした
 り、扉の幅を広げて、両開
 きにした電車が多く見られ
 ますが、これは短い停車時
 間に、できるだけ多くの通
 勤、通学客を乗り降りさせ
 るためです。現在全長二十
 米の電車では四つ扉が標準
 形ですが、一部の私鉄には

五つ扉の車も走っています
 (一) 三つ扉
 中距離形の国電(全長二
 十米)一つ扉の幅は一米で
 三つ扉で合計三米の扉幅で
 す、しかも、片開きなので
 全部が開くまでに時間がか
 かります。

(二) 四つ扉
 現在の標準形通勤国電(全長二十米)は、一つの扉の幅が一・三米あり、両開きです。片開きの半分の時間で全開出来ます。四つで合計五・三米の出入り口幅ですから、前の三つ扉の一・八乃至二倍くらいの能力があります。

(三) 五つ扉
 京阪電気鉄道5000系、全長一八・七米に対して、幅一・二米の両開き扉五つで合計六米の出入り口幅をもっています。昼間の空いている時は、二つの扉は閉じて、座席がセットされる仕組みになっています。

編集部より

五十四年度は此の号によつて終了ですが、お蔭様で五回に八枚を出す事が出来ました。原稿を頂きました諸先生に厚く御礼申し上げます。